

日韓の大学生における授業中のマナーに関する 意識と行動の比較

加納 陸人・二ノ神 正路

A Comparison of Classroom Manner Consciousness and Behavior in Japanese and Korean University Students

Michihito Kano · Masamichi Ninokami

In this study, results of a questionnaire survey about classroom manner consciousness and behavior, which was conducted in June-July 2012, November 2013, and June-July 2014 with Japanese, Chinese, and Korean university students, were analyzed. In this paper, the survey results of Japanese university students and Korean university students' results are compared and analyzed in three areas: use of the cell-phone during class, going in and out of the room during class, and personal appearance in the classroom (for example, wearing hats in class).

Our results showed a general tendency among Japanese students to be more concerned than Korean students about behavior that might disturb others. We plan to look more closely at the reasons for this.

1. はじめに

日本の大学では以前から、一部の学生が授業中に取り行動（私語をする、携帯電話を使用する、他の授業の課題を行う、化粧をするなど）が問題にされてきた。しかし、これらの行動が授業中に見られるというのは日本に限った話ではなく、近年、韓国や中国の大学においても同様であるという。異なる国の学生たちではあるが、よく考えてみるとこの三カ国の大学生の世代¹⁾は、成長過程における社会背景に共通した点が多いように思われる。少子化の中で育ってきたということ、幼少期からパソコンや携帯電話といった情報端末をコミュニケーションツールのひとつとして当前のように使用してきたことなど、異文化で育ってきた学生たちであるにも関わらず、そこには近似した学生像が想起されてしまうのではないかと。ましてや上に挙げたような行動の合致が見られたと聞けば、今どきの大学生はどこの国もみな似たようなものだと感ぜずにはいられない。

だが、同じような現象——授業中に私語をする、携帯電話を使用するなど——が見られたからといって、この三カ国の学生たちの授業マナーを表面的な部分だけで捉えてしまうのは早急である。同じ行動に見えたとしてもその心理は必ずしも一致するものではない。マナー違反であるとはわかっていて授業中に私語をすることと、マナーに反するものと思わずに授業中に私語をすることとは、まったく異なる。各国の学生たちはその授業中の行動（授業マナー）に対して、どのような意識を伴っているというのであろうか。

本研究はこのような点に着目し、日本、中国、韓国という三カ国の大学生を対象に授業中のマナーに関する意識と行動についてアンケート調査を実施した²⁾。本稿は、その中で日本と韓国の大学生の調査結果に絞って比較、分析したものである。授業中のマナーに関する意識と行動

について、その調査結果から、日韓両国の大学生の現在の姿を捉えてみたい。

なお、紙幅の関係上、すべての調査結果について述べることはできない。そこで、本稿においては特に示唆に富む結果が得られたものとして「携帯電話の使用」「教室の出入り」「身だしなみ」の3つの項目に関連した調査結果について論述した。

2. 調査の概要

アンケート調査は、日本：関東地方の私立大学2校（うち、女子大が1校）、韓国：ソウル市内の私立大学2校と忠清北道の私立大学1校の計3校で行った。調査期間は2012年6月上旬～7月下旬、2013年11月、2014年6月下旬～7月上旬の3回にわたって行い、回答はアンケートを依頼した教員の担当授業内で実施してもらった。なお、韓国での調査は韓国語で作成したアンケート用紙を使用している。

アンケートの設問はABCDの全部で4つである。設問Aでは「授業中、次のような学生をみかけた場合、あなたはどのように思いますか」という問いに対して「私語をする」「遅刻してくる」といった14項目に「たいへん気になる」「やや気になる」「あまり気にならない」「まったく気にならない」の4段階の評価で回答してもらった形をとった。

設問BとCでは、B「ゼミのような少人数で行う授業で、次のような場面に遭遇した場合、あなたはどのような行動をとりますか」、C「大教室で行うような多数の学生が受講している授業で、次のような場面に遭遇した場合、あなたはどのような行動をとりますか」のように教室の大きさ、受講者の数が異なる場面において、「携帯にメールが送られてきた」「授業の途中、トイレに行きたくなった」などのような状況を設定し、それぞれの場面でどのような行動を取るか、14項目にわたって尋

ねた。回答は、例えば「携帯にメールが送られてきた」であれば、「周りを気にせず返信する」「周りを気にはするが返信する」「メールの確認だけして、返信はしない」のように設け、選択してもらう方式をとった。

設問Dでは、自国の大学生の授業中のマナーに関して、日頃感じていることを自由記述してもらった。

3. 分析対象者の属性

日本と韓国の分析対象者の属性は、以下の通りである。

分析対象者の属性

日 本

| 男 性 | 女 性 | 未記入 | 合 計 | | |
|------------|------------|-----------|-----------|---------|-----------|
| 45.6 (211) | 54.2 (251) | 0.2 (1) | 100 (463) | | |
| 1 年 | 2 年 | 3 年 | 4 年 | 未記入 | 合 計 |
| 51.2 (237) | 27.9 (129) | 16.4 (76) | 3.9 (18) | 0.6 (3) | 100 (463) |

韓 国

| 男 性 | 女 性 | 合 計 | | | |
|------------|------------|-----------|-----------|---------|-----------|
| 48.7 (135) | 51.3 (142) | 100 (277) | | | |
| 1 年 | 2 年 | 3 年 | 4 年 | 未記入 | 合 計 |
| 21.3 (59) | 28.5 (79) | 26.4 (73) | 23.5 (65) | 0.4 (1) | 100 (277) |

* 数値は%、()内の数字は各項目の有効回答数を示す(以下、同様)

4. 調査結果と分析

4.1 携帯電話の使用

A 授業中、次のような学生をみかけた場合、あなたはごどう思いますか

| | | たいへん 気になる | やや 気になる | あまり 気にならない | まったく 気にならない | 合 計 |
|--------------------|----|--------------|------------|---------------|----------------|----------|
| 携帯電話でメール などををする | 日本 | 5.9 | 24.5 | 45.3 | 24.3 | 100(461) |
| | 韓国 | 6.5 | 27.9 | 45.3 | 20.3 | 100(276) |

B ゼミのような少人数で行う授業で、次のような場面に遭遇した場合、あなたはどのような行動をとりますか

| | | 周りを 気にせず 返信する | 周りを 気には するが 返信する | メールの 確認だけ して、 返信は しない | メールの 確認をし、 相手に よっては 返信する | メールの 確認はせず、 授業が 終わって から確認 する | その他 | 合 計 |
|-------------------|----|---------------------|---------------------------|-----------------------------------|--------------------------------------|---|-----|----------|
| 携帯にメールが 送られてきた | 日本 | 8.4 | 12.5 | 23.3 | 27.0 | 23.7 | 5.1 | 100(455) |
| | 韓国 | 5.8 | 21.8 | 25.8 | 38.9 | 5.8 | 1.9 | 100(275) |

C 大教室で行うような多数の学生が受講している授業で、次のような場面に遭遇した場合、あなたはどのような行動をとりますか

| | | 周りを 気にせず 返信する | 周りを 気には するが 返信する | メールの 確認だけ して、 返信は しない | メールの 確認をし、 相手に よっては 返信する | メールの 確認はせず、 授業が 終わって から確認 する | その他 | 合 計 |
|-------------------|----|---------------------|---------------------------|-----------------------------------|--------------------------------------|---|-----|----------|
| 携帯にメールが 送られてきた | 日本 | 17.1 | 18.2 | 20.2 | 26.2 | 14.5 | 3.8 | 100(450) |
| | 韓国 | 16.0 | 22.5 | 22.2 | 34.6 | 3.6 | 1.1 | 100(275) |

携帯電話の使用に関して、Aの設問では、日本人学生（以下、JS）と韓国人学生（以下、KS）の回答において近似した割合が出ていた。両国とも「たいへん気になる」「やや気になる」と回答した数が合わせて約3割、「あまり気にならない」「まったく気にならない」と回答した数が約7割という結果となっている。これは、JSとKSの両方で「他の学生が授業中に携帯電話を使用すること」に関してはあまり気にしていない傾向を示しているということになる。現在、日韓ともに大学生が所持する携帯電話はスマートフォンが主流となっており、韓国の大学生に関していえば、スマートフォン所持率は100%に近い状態とあってよい。スマートフォンはそれまで普及していたフィーチャーフォン³⁾とは異なり、様々な機能を備えており、インターネットを使用する上でも非常に高い利便性を有する。そのため、調べ物をしたり辞書を使用したりなど、授業中にスマートフォンを利用する機会はフィーチャーフォンよりも格段に増えたといえる⁴⁾。このような状況にあれば、他の学生が授業中に携帯電話を使用するというのは——それが仮に個人的な携帯電話の使用であったとしても——、すでに日常の風景の一部となっており、今さら取り立てて目を向けるようなことではなくなってしまうとも見ることができる。JSとKSの調査結果において「他の学生の携帯使用が気にならない」という傾向にあるのは、日本と韓国で授業中のスマートフォンの利用状況が近づきつつあることを示していると考えられることもできよう。

次にB、Cの設問を見ると、両国とも「少人数」より「大教室」の授業の方が「メールを返信する」（「周りを気にせず返信する」「周りを気にはするが返信する」）と回答する割合が増えるのは共通しているが、「授業が終わってから確認する」と回答した割合は、KSではB5.8%、C3.6%と数値に大きな差がないのに対し、JSはB23.7%、C14.5%と10%近く差が出ていた。これらの結果から考えられるのは、まずKSは全般

的に「授業中の携帯使用を許容する傾向にある」ということである。この点に関してKSにフォローアップインタビューを行ったところ⁵⁾、「重要な用件かもしれないから、授業中でもメールの確認ぐらいは許される」「就職試験の合否の連絡であれば、授業中でも携帯電話の使用はかまわない」などの意見が聞かれ、理由があれば授業中の携帯電話使用も許容されるものと考えている様子が窺えた。韓国では一般的に、地下鉄車両内での携帯電話による通話はマナー違反とはみなされず、小さな声で話すというのがマナーとされている。これは、どこにいても連絡できるというのが携帯電話の特性であるのに、車両内で通話できないのでは意味がないということであるらしい。ここから授業中であっても連絡がとれないのでは携帯電話の意味がない、といった心理を読み取ることも可能なのではないだろうか。

一方、JSは「授業が終わってから確認する」の回答の割合が「少数」では23.7%であったのに対し、「大教室」では14.5%と減少していたわけだが、その数値の減少に伴って「周りを気にせず返信する」「周りを気にはするが返信する」はそれぞれB8.4%→C17.1%、B12.5%→C18.2%と増加している。ここにはJSの「場面に合わせて授業中の携帯使用をコントロールする」という傾向のあることが窺える。西本ほか(2011a)の調査においても、「小さい講義室の授業」より「大きい講義室での授業」の方が「授業中に携帯メールをする」のが増加傾向にあるとの結果が出ており、そこには、人が増えれば携帯電話を使っても目立たないだろう、という学生の心理を読み取ることができる。また、葛城(2012)は、ボーダーフリー大学⁶⁾での調査ではあるが、その中で学生は「他者に迷惑をかけたり、害を与えたりするような逸脱行為でなければ、『許される』と考えている」と述べていて、さらに「当の学生には他者に迷惑をかけていることなど認識できていない」、「他者に迷惑をか

けている、害を与えているという範疇に、他者の学びの意欲を削いでいることは含まれていない」と考察している。この考察に照らし合わせてみると、人に埋もれてしまえば、自分の行為も目立たなくなり、迷惑にはならないので携帯を触っていても許されるというのがJSの心情となるようだ。

原田（2010）は、日本の若者にとっての携帯を「人間関係ツール」であるとし、携帯の普及とともに巨大ネットワークを形成し、その結果若者たちがお互いに顔色を窺い協調していく「新村社会」が生まれたと述べている。日本ではスマートフォンの所有率の増加に伴い、LINEやFacebookなどのソーシャルネットワーキングサービス（SNS）⁷⁾を利用して知人、友人と連絡を取る人が増えており、ネット依存、SNS依存の問題が取りざたされるようになった。韓国でもこの問題は以前から大きな社会問題として関心を集めている。「授業中、だめだとわかっている、携帯をいじらずにはいられない」のが、今の日韓の大学生の実態なのかもしれない。

4.2 教室の出入り

A 授業中、次のような学生をみかけた場合、あなたはどのように思いますか

| | | たいへん 気になる | やや 気になる | あまり 気にならない | まったく 気にならない | 合 計 |
|-------------------|----|--------------|------------|---------------|----------------|----------|
| 授業の途中で 教室を出ていく | 日本 | 25.9 | 43.8 | 21.4 | 8.9 | 100(463) |
| | 韓国 | 20.8 | 41.2 | 27.0 | 10.9 | 100(274) |

B ゼミのような少人数で行う授業で、次のような場面に遭遇した場合、あなたはどう行動をとりますか

日韓の大学生における授業中のマナーに関する意識と行動の比較

| | | 先生に申し出てからトイレに行く | 何も言わずだまってトイレに行く | 先生にみつからないようこっそりとトイレに行く | その他 | 合計 |
|-------------------|----|-----------------|-----------------|------------------------|------|----------|
| 授業の途中、トイレに行きたくなった | 日本 | 56.0 | 27.6 | 6.2 | 10.2 | 100(450) |
| | 韓国 | 18.8 | 52.9 | 18.1 | 10.1 | 100(276) |

C 大教室で行うような多数の学生が受講している授業で、次のような場面に遭遇した場合、あなたはどのような行動をとりますか

| | | 先生に申し出てからトイレに行く | 何も言わずだまってトイレに行く | 先生にみつからないようこっそりとトイレに行く | その他 | 合計 |
|-------------------|----|-----------------|-----------------|------------------------|------|----------|
| 授業の途中、トイレに行きたくなった | 日本 | 25.1 | 51.8 | 12.8 | 10.3 | 100(454) |
| | 韓国 | 13.1 | 51.6 | 28.0 | 7.3 | 100(276) |

教室の出入りに関して、Aの設問で最も割合が高かった回答はJS、KSともに「やや気になる」でそれぞれJS43.8%、KS41.2%であった。全体的には、「気になる」（「たいへん気になる」「やや気になる」）と回答したのがJS69.7%、KS62%、「気にならない」（「あまり気にならない」「まったく気にならない」）がJS30.3%、KS37.9%となっており、結果を見る限り、JSはKSに比べてやや気にする傾向にあり、KSはJSに比べてやや気にしない傾向にあると捉えることができる。

ただし、この結果について行ったフォローアップインタビューでは、JSとKSでどちらも似たような意見しか出ておらず、あまり差を感じられるものではなかった。例えば、「気になる」ということに関しては、JSとKSで「授業の雰囲気が壊れるから」などの理由を述べる者が多かった。また、「気にならない」について、JSでは「体調不良」や「緊急の用事」など、教室を出ていった学生に何らかの理由があったのだろうと推察し、その状況であれば授業途中で教室を出るのもやむを得ないこと

だと一定の理解を示す意見が出されていた。KSでも「急ぎの用事なら仕方ない」「トイレなどは生理現象だからしょうがない」などJS同様に理解を示す意見が挙げられていた。あくまで推測の域を出ることはできないが、調査結果どおりにJSとKSの両者を捉えるとするならば、日本は「周りの空気を読む」ことや「相手の顔色を窺う」ことを求められることが多く、このことがJSの結果にも表れ、KSよりも「気にする」という傾向がやや高めに出了と考えることができる。「理解はするが、教室の雰囲気を感じてほしい」というのがJSの心情であろうか。

次にB、Cの設問を見ると、JSのBでは「先生に申し出てからトイレに行く」が56.0%で一番高い割合となっているが、Cになると51.8%が「何も言わずだまってトイレに行く」と回答しており、BとCで割合の高い回答が異なる結果となった。Bで「先生に申し出てからトイレに行く」の割合が最も高かった理由というのは、「ゼミのような少人数で行う授業」であれば、教員との距離も近く話しやすいからだと推測できる。また、Cで「何も言わずだまってトイレに行く」の割合が最も高かったのは、「大教室」は教員に許可を得るには距離があり断りを入れるのが、他にインタビューでは「大勢の人の前でトイレに行くことを宣言するのは、はずかしい」、「授業を中断させてしまうのは良くない」といった意見も出ており、ここにも前述した「周りの空気を読む」「相手の顔色を窺う」といったJSの心理状態を見て取ることができる。

一方、JSに比べてKSの特徴的な部分として挙げられるのが、「何も言わずだまってトイレに行く」と回答した割合がB、Cともに5割を超えている点で、場面の違いはあまり影響していないといえる。これは、Aの設問で行ったフォローアップインタビューでの意見にも出ていた「授業の雰囲気が壊れる」ことを優先的に回避するための行動ともとれるが、

他に「生理現象だからしょうがない」などの意見もあり、理由があるのだから人に申し出る必要もない、という自分の行動を正当化する面も感じられた。ただし、「先生にみつからないようこっそりトイレに行く」ではB18.1%→C28.0%と増加しており、これは、授業中にトイレに行くことそのものを否定的に捉えていることへの裏返しの行為ともいえ、生理現象だからと自分の行動を正当化する学生ばかりではないといえる。

4.3 身だしなみ

A 授業中、次のような学生をみかけた場合、あなたはどのように思いますか

| | | たいへん 気になる | やや 気になる | あまり 気にならない | まったく 気にならない | 合 計 |
|------------------|----|--------------|------------|---------------|----------------|----------|
| 帽子をかぶった ままている | 日本 | 22.7 | 34.6 | 28.9 | 13.8 | 100(463) |
| | 韓国 | 2.9 | 13.8 | 42.5 | 40.8 | 100(275) |

B ゼミのような少人数で行う授業で、次のような場面に遭遇した場合、あなたはどのような行動をとりますか

| | | 帽子をかぶっ たまま授業を 受ける | 授業中は 帽子を脱ぐ | 注意されな ければかぶっ たままている | その他 | 合 計 |
|------------------|----|-------------------------|---------------|---------------------------|-----|----------|
| 帽子をかぶって 学校へ来た | 日本 | 3.8 | 88.4 | 5.4 | 2.4 | 100(449) |
| | 韓国 | 30.2 | 39.6 | 26.2 | 4.0 | 100(275) |

C 大教室で行うような多数の学生が受講している授業で、次のような場面に遭遇した場合、あなたはどのような行動をとりますか

| | | 帽子をかぶっ たまま授業を 受ける | 授業中は 帽子を脱ぐ | 注意されな ければかぶっ たままている | その他 | 合 計 |
|------------------|----|-------------------------|---------------|---------------------------|-----|----------|
| 帽子をかぶって 学校へ来た | 日本 | 5.0 | 86.0 | 6.8 | 2.2 | 100(456) |
| | 韓国 | 30.1 | 36.6 | 30.1 | 3.2 | 100(276) |

身だしなみにおいて、Aの設問でJSは「たいへん気になる」22.7%、「やや気になる」34.6%と6割近くが授業中に帽子をかぶったままにいる学生のことを「気になる」と回答しているのに対し、KSでは「あまり気にならない」42.5%、「まったく気にならない」40.8%と約8割が「気にならない」と回答しており、日韓で大きな違いの出る結果となった。さらにB、Cの設問を見てみると、日韓ともに「少人数」と「大教室」の異なる場面においても、数値にあまり大きな違いはなく、JSはB、Cでそれぞれ9割近くが「授業中は帽子を脱ぐ」と回答しているのに対し、KSは「帽子をかぶったまま授業を受ける」「注意されなければかぶったままにいる」を合わせると、B、Cともに約6割が「授業中、帽子をかぶったままにいる」と回答していたことになる。

これらの結果から見えてくる両者の違いは、JSは「授業中は脱帽すべきである」と考えており、KSは「授業中、帽子をかぶったままがかまわない」と考えている学生が多いということである。

そもそも日本の脱帽マナーは、明治期に入り、西洋から洋装文化が入ってくるようになったことが始まりだと考えられる。協同組合西日本帽子協会のホームページによると、1872年（明治5年）に旧礼服を廃して洋式がとり入れられたという。その後、1873年（明治6年）1月13日には絵図姿入りで大礼服制の改正が公布され、当時の絵姿には注意書として、「冠を脱せざるを以て礼となし、帽子は脱するを以て礼と定むべし」と、ていねいに脱帽姿まで書かれていたということである。女性の場合、現代でもパーティーなどの公の場では、帽子の着用を含めて正装とされていることからわかるように、屋内でも着帽のままにいるわけだが、日本では、しかる場所で「帽子を脱ぐこと」が男女を問わず一般的な礼儀として定着していったということなのだろう。したがって、現代の日本においても脱帽するという意識は強く残っており、授業中、帽

子をかぶったままの学生を見ることも、自分が帽子をかぶったままでいることにも抵抗を感じる学生が多かったということになる。

一方、KSの結果はどのように捉えたらよいのだろうか。本来、脱帽マナーは韓国にも存在しているようだ。資料が得られなかったため、ここで提示することはできなかったが、ある韓国人の大学教員からは「本来は帽子を取るべきだが、みんながかぶったままであまりうるさくも言えないので最近はそのままだにしている」という発言が得られた。また、KSへのフォローアップインタビューからも「目上の人の前ではしっかりと帽子を取りなさい」と幼いころから両親に言われて育ったという者の多いことがわかった。

柳喜卿（2002）によると韓国に洋装文化が入ってくるようになったのは1800年代後半の李氏朝鮮時代末期ということである。時代背景からして洋服は日本経由で韓国に入ってきたと考えられるが、同時に脱帽の礼儀も伝えられ、その後、韓国においても一般的なマナーとして広がっていったものと推測される。

では、なぜ韓国では「帽子をかぶったままでかまわない」と考えるKSが多かったのだろうか。その理由のひとつには、帽子をファッションの一部としてだけでなく、機能的な道具としても活用していることが考えられる。以前、ある韓国人学生に授業中なぜ帽子をかぶったままなのか尋ねてみたところ、返ってきた答えは「昨日は髪を洗っていないから帽子をかぶっている」とのことであった。KSへのインタビューでこのことを確認してみると「洗髪をしていないときや髪形を整えていないときなどは、帽子をかぶる人が多い」ということである。しかも、おもしろいのは、洗髪していない場合などにかぶってくる帽子というのはファッション性の低いものが多いとのことで、学生同士、帽子を見れば大体においてどのような状態か判断がつくという（もっとも、その

場合、帽子だけではなく服装も運動服などのファッション性の乏しい格好をしていることが多いので、全体的な雰囲気でわかるということらしい。KSの心理状態は、「髪を洗っていない頭を人目にさらす方がむしろ礼儀を欠いた行為で、帽子をかぶっている方がまだましだ」ということらしく、その結果、着帽のまま授業を受けることを許容する傾向が強くなったと考えられる。JSへのインタビューからも寝癖や髪形がうまく決まらない時に帽子をかぶるという声を得られており、似たような帽子の活用をしているわけだが、その一方で帽子を「ファッションの一部だからはずしたくないのではないか」などと捉える学生も少なくなく、着帽をおしゃれの延長線上にあるものとして捉える傾向はやはり日本の方が強いようだ。

韓国は日本の湿潤な気候に比べると大陸性の気候で乾燥している。また、どの家もオンドルと呼ばれる温水式の床暖房を備えているのが一般的で、湿気の多い時期にはこのオンドルを用いて部屋の中の空気を乾燥させることができるので、前日にシャワーを浴びていなかったとしても、体臭を気にするほどではなく、自分自身も不快な思いをしないでいられる。こういった日韓での背景の違いもあり、韓国の学生たちはその問題を帽子ひとつで解決しているわけである。

5. 比較から見えてくる日韓大学生の授業マナーの意識と行動

以上、「携帯電話の使用」「教室の出入り」「身だしなみ」という3つの項目に関連する日韓大学生のマナー意識と行動について分析した。

最後にもう一度、それぞれの項目についてまとめてみる。

まず、「携帯電話の使用」についてだが、ここでは、両国に共通して携帯電話を傍らにおいて授業を受ける学生の姿というものが浮かんでくる。しかし、JSは場面で使い分ける傾向があり、どうにか携帯の使用を

コントロールしようという気配が窺える。KSはJSに比べると自分の携帯電話使用について、場面に関わらず使用すると回答している傾向が強く、これは、全般的にKS自身の意識において理由があれば授業中でも携帯電話使用が許容されると考えていると読み取ることができた。「重要な用件かもしれないから、授業中でもメールの確認ぐらいは許される」という意見があったが、KSへのインタビューの中には、教室を出るということを前提に「重要な用件であれば、通話も可能だ」と述べている者もあり、条件次第で携帯の使用が優先されるという意識がここから見て取れる。現状では、携帯依存の度合いは韓国の方が進んでいる印象を受けるが、今後、日本でも若者の携帯依存度がより増していくようなことがあれば、両国の授業でのマナー意識はより近接していく可能性がある。

「教室の出入り」では、大きな差としては表れていないがJSがKSより他の学生の出入りに関して「気になる」という傾向があった。これは「周りの空気を読む」「相手の顔色を窺う」といった日本的な文化によるものと見ることができ、その学生に対して「空気を読む」ことを要求するからこそ、気になるものと考えられる。ただ、一方では「何か理由があるのだろう」と相手の立場を慮った意見も出ており、授業中に教室を出て行くという行為は、マナーに反する行為であると批判をするまでのものとはなっていないようである。これに対し、KSは特に自らの教室の出入りについては、断りを入れる必要はないと考えている者の多いことがわかった。そこには、理由があれば正当化されると考えている様子も窺うことができたが、一方では、授業中、トイレを理由に教室を出入りすることに後ろめたさのようなものを感じている者も存在しており、JSに比べるとKSは、自分の行為を気にする者と気にしない者との開きが大きいようである。

最後に「身だしなみ」については、ファッション性を追求して帽子を取らないのも、頭髪を人目にさらすことに問題を感じて着帽しているのも「見かけをよくする」という意識が働いていることには変わりがなく、日韓の大学生の意識がよくここに表れている。また、本来は脱帽マナーが存在していた両国であるが、日本では、現代でも基本的なマナーとして根強く意識されているのに対し、韓国では、自分たちの解釈によってそれまでのマナーとは異なる新たなマナー意識が出来上がりつつあるようだ。子供のころから両親には「目上の人の前ではしっかりと帽子を取りなさい」と教育を受けてきたというKSだが、ある意味ではここでも自分たちの都合を優先しているようにも受け取れる。洗っていない頭を人目に触れさせる方がマナーに反するというのが彼らの主張だが、この行為を大学生よりも上の年代でどのように捉えているのか調査すれば、韓国における脱帽マナーについてより詳しく見えてくるであろう。

本稿で取り上げた項目は調査結果の一部に過ぎない。日韓の大学生における授業中のマナー意識と行動の全体像を導き出すためには、他の項目に関してもより詳細な分析を加える必要があるが、残りの部分に関してはまた稿を改めることとしたい。また、ここでは扱うことのできなかつた中国の調査結果についても日中で比較、分析し、最終的には東アジアという枠組みの中で日中韓の大学生における授業中のマナーに関する意識と行動について研究を進めていくことは今後の展望としておきたい。

<注>

- 1) 日本では「ゆとり教育」を受けて育った「ゆとり世代」、中国では1990年以降に生まれた「90后（ジョウリンホウ）」、韓国ではデジタル技術とともに育った「N世代（ネット世代の略）」、1988年のソウルオリンピックの前後の年に生まれた「G世代（Green、Global

世代の略)」などのように呼び名がつけられており、現在の各国の大学生は、それぞれこれらの世代に該当する。少子化、デジタル社会での成長のようにその特徴がすべて三カ国に共通するというわけではないが、「怒られることに慣れていない」（日・中）、「両親からの関心を独り占めしながら成長した」（中・韓）、など重なりあう点は多い。

- 2) 中国では福建省の国立大学1校と河南省の私立大学1校の計2校を対象に調査を行ったが、本稿に中国の調査結果は含まれない。
- 3) フィーチャーフォンとは、スマートフォンが普及する以前に広く普及していた携帯電話の通称で、日本では独自の進化を遂げたことから「ガラパゴスケータイ」とも呼ばれる。スマートフォンが高機能・多機能の携帯電話であるとするれば、フィーチャーフォンはそれに比べ、機能の劣るものが多い。
- 4) 筆者の1人は、2004年～2013年まで韓国の大学で勤務していた。スマートフォンが普及する以前は、授業中に紙の辞典や電子辞書を用いる学生の姿が見られたが、普及以降、そのほとんどがスマートフォンを使用する姿に変わっていくという状況を経験している。
- 5) フォローアップインタビューは、日本は筆者らが勤務する大学の文学部の学生（女性4名、男性2名）、韓国は筆者の1人が以前勤務していた大学の日本語学科所属の学生（女性2名、男性2名）を対象に行った。
- 6) 葛城（2002）では、ボーダーフリー大学を「受験すれば必ず合格するような大学、すなわち、事実上の全入状態にある大学」と定義している。
- 7) 人と人とのつながりを促進したり、サポートしたりするコミュニティ型のWEBサイトのこと。

<引用、参考文献>

- 石垣尚男（2006）「日常生活行動に対する大学教員と学生の許容意識－授業中の行動を中心として－」『愛知工業大学研究報告』第41号B, 189-194
- 小倉紀藏（2001）『韓国人のしくみ』講談社現代新書
- 葛城浩一（2012）「ボーダーフリー大学が直面する教育上の困難－授業中の逸脱行動に着目して－」『香川大学教育研究』第9号, 89-104
- 島田博司（2001）『大学授業の生態誌－「要領よく」生きようとする学生－』玉川大学出版部
- 島田博司（2002）『私語への教育指導－大学授業の生態誌2－』玉川大学出版部
- 島田博司（2002）『メール私語の登場－大学授業の生態誌3－』玉川大学出版部
- 武内清・浜島幸司（2010）「大学生の意識とマナー」『大学と学生』第86号, 6-18
- 西本佳代・村上光朗ほか（2011a）「大学生のマナーに関する実証的研究（上）」『香川大学教育学部研究報告』第I部, 第135号, 23-40
- 西本佳代・村上光朗ほか（2011b）「大学生のマナーに関する実証的研究（下）－KH Coderによる自由記述の分析」『香川大学教育学部研究報告』第I部, 第136号, 1-13
- 朴吉聲、水野邦彦・萩原いずみ訳（2003）「韓国N世代の文化と世代経験」『北海学園大学学園論集』第117号, 89-104
- 原田曜平（2010）『近頃の若者はなぜダメなのか 携帯世代と「新村社会」』光文社新書
- 山口修司ほか（1994）「本学学生の生活実態調査V－マナーに関して－」『高松短期大学研究紀要』第24号, 73-84

- PMG 지식엔진연구소 (2013) 『시사상식사전 ios版』 박문각 (PMG知識エンジン研究所 (2013) 『時事常識事典ios版』 PMGBOOKS)
- Tokyo Panda (2013) 『《80后·90后》中国ネット世代の実態』 角川新書
- 기획재정부·KDI (2010) 『시사경제용어사전 ios版』 (企画財政部·KDI (2010) 『時事經濟用語事典ios版』)
- 김기란·최기호 (2009) 『대중문화사전』 현실문화연구 (金ギラン·崔キホ (2009) 『大衆文化事典』 現実文化研究)
- 柳喜卿 (2002) 『한국복식사연구』 이화여자대학교출판부 (柳喜卿 (2002) 『韓國服飾史研究』 梨花女子大学校出版部)
- 協同組合西日本帽子協会ホームページ「Hat&Cap」
<http://www.hatandcap.or.jp> (2015年1月5日アクセス)